

# アイユーゴー 通信 第12号

申し込み・問い合わせ先：アイユーゴー ～途上国の人と共に～ 事務局

住所：590-0432 大阪府泉南郡熊取町小垣内1-10-18 TEL：072-452-8340 FAX:072-452-5680・090-9167-7053 (新田)

振込先：[アイユーゴー ダイヒョウリジ ニッタサチオ]

ゆうちょ銀行：00980-2-71223 / 三菱東京UFJ銀行阿倍野支店：6,921,467 / 三井住友銀行佐野支店：7,260,788

e-mail：[snittaskmj0715@yahoo.co.jp](mailto:snittaskmj0715@yahoo.co.jp) homepage：<http://aiyugo.fc2web.com> (設立：2001/10/15)

発行 新田 幸夫 編集 加藤 鐘三 中川 一之 発行者(株)フジカク

## 目次

- (1) (特集) マダガスカル共和国への救急車寄贈に伴う現地視察の報告  
～アイユーゴー代表 新田 幸夫～
- (2) アイユーゴーとの出会い  
～アイユーゴー理事 内田 浩幸～
- (3) ベトナムを訪問し、感じたこと  
～新田 真矢子～
- (4) ベトナム訪問の感想  
～中村 実加～
- (5) ラオスの人たちから学んだこと  
～加藤 三奈～



## マダガスカル共和国への救急車寄贈に伴う現地視察の報告

アイユーゴー 代表 新田 幸夫

### はじめに

マダガスカルの青年たちとまた会おうと言って別れて早くも1年が過ぎた。昨年、10月29日(月)～11月3日(土)までの6日間に、熊取町消防本部警備課救急専門官に同行してマダガスカル共和国ムラマンガ市における救急車の寄贈式典に参加した。ムラマンガ市に救急自動車を寄贈することは、救急医療体制の第一歩がとられることを意味し、多くの方がファーストエイドで救われることになる。そればかりでなく、同市はマダガスカル共和国の独立の発端となった地であり、国民が何かと注目する所である。それだけに救急自動車寄贈は、貧困に喘ぐ同国民にとって非常に明るいニュースを提供することになるのである。

### マダガスカルへの救急車寄贈の背景

2005年に日本で開催された「愛・地球博」を訪ねたマダガスカル共和国の大統領が、熊取町の私立病院に立ち寄ったことから、町役場との関係が始まった。その時、大統領は医療関係の支援を希望され、国内では排ガス規制のために使用できなくなった救急車を、ムラマンガ市に寄贈することになった。行政のみで寄贈するには予算的に厳しいので、日本の外務省の無償援助(助成金)の協力により輸送費を賄う事とな

った。私たちは外務省と東京の在日マダガスカル大使、そして現地 NGO と連携し、期日までに救急車を適切に送ることであった。まさに無償ボランティアの業務を完了するまで、ほぼ9ヶ月かかった。

### マダガスカル共和国の概要

マダガスカル共和国は、インド洋上に浮かぶ島国でアフリカの東部ソマリアの対岸に位置し、面積は日本の1.6倍、人口1,910万人、アフリカ大陸系民族、マレー系、後開発途上国の低所得国である。2008年の国民一人当たりの年間所得は350ドルと低く、貧困の削減がこの島国の最重要課題である。これら貧困所帯は全体の90%が農村地域に集中しており、村落は自給自足農業を主体とした伝統的農業であり、経営手法や技術的な遅れによって非効率的な生産を行っている。今後は、地域の農業の単一商品に偏りがちな生産物の見直しや、技術や手法あり方の改善を目的とした取り組みが急務である。

### マダガスカル共和国アンタナナリボ空港へ

関空からタイ航空の便でバンコクへ。そこからスワナブーム国際空港にてマダガスカル航空に搭乗し、レ・ユニオン経由でアンタナナリボ空港へ。これからアフリカ大陸の東南にあるマダガスカルという国に向かうのかと変に実感した。



現地関係者との打合せ「自分たちのアイデンティティを探る」

空港に旅行社の現地スタッフと通訳が迎えに来ていた。荷物を積み込んで空港を出た。途中、在マダガスカル日本大使館員草の根外部委員加藤美代子様と合流し、JICA事務所を訪問した。所長の外川徹氏から日本青年海外協力協会から派遣されてきた若者の職務状況をお聞きし、マダガスカルの現状の説明を受けた。その後、日本大使館を訪問し、乳井忠晴大使と面談を行い、ホテルに到着後、NGO サクラのラライラ代表と面談を行った。



左より、小西氏、ラライラ代表、新田代表

NGO サクラ「SAKURA」は国費で日本に留学した経験のある人で組織されている。大使公邸に招かれ、同席したNGOサクラの代表たちと話をするうちに、この国のために一つずつ事業を組み立てていきたいと語る青年たちの真摯な姿勢に胸を打たれた。後を押すように、大使が、「アイデンティティを探るNGOの若者たちに何か助言を」と話されたときには、身が引き締まった。NGOサクラの会長は、「自分たちはアフリカ人ではない」としながら、自分たちのアイデンティティをどのように築いていくべきか自問していたのだ。更に大使は、新渡戸稲造の『武士道』に触れ、日本人の精神論を語り始めた。意気が高まってきた。これまで十数人の大使、大使経験者とお話をする機会があったが、この大使ほど外交哲学をお持ちの方は初めてであった。



左より乳井大使、松浪夫人、ガイ市長、新田代表、アルバート助役、小山氏、大西氏、ラライラ代表

救急自動車寄贈式典

救急車のサイレンが繰り返し鳴らされた。市民がどこからともなく式典に集まってきて、救急車を遠巻きにして覗き込んだ。ムラマンガ市の救急活動の始まりである。そして、サイレンの響きが同市民の喜びを象徴しているように思えた。式典は、司会の挨拶に続き、ムラマンガ市長、新田（上垣町長の代読）、県知事、乳井大使等の順で挨拶を行い、救急自動車のキーの引渡し式を行った。NGO サクラメンバーや現地の青年海外協力隊員等も参加した。大西専門官は、救急自動車の作動方法の説明を、時間の許す限り行ったが、十分に教示するには時間が少なく、帰国後、使用法をDVDに収め、現地JICA宛に送付した。



救急自動車の作動方法の説明する大西専門官



ムラマンガ市内レストランにて青年海外協力隊員と共に昼食

青年の家視察

青年の家は、8歳から25歳までの子供や就業できない人が通う施設。青年スポーツ省が管轄し、精神的自立と健康管理に関する指導を行っている。同じ建物の隣では、エイズの検査が可能なOraQuickなどが常備されており、匿名で検査ができるよう配慮をしているということだった。小さな器具でのエイズ検査は5分、血液検査は10分しかかからず、利用者が多くいるようだ。検査資材はアメリカのNGOが無料で提供しているといった。この青年の家は、年齢層が広いので、午前、午後に分け、8時30分から18時までの





間、指導をしている。

グローバル化が進む中で、各国の影響を受けるときに最も注意すべきことは、青少年の育成が十分されているのかどうかに他ならない。それと同時に若者の健康、性道德、そして、彼らの命をどのように守るべきか、これが青年の家で指導する人の任務と思われた。

### マダガスカル今後の課題と提言

マダガスカルは、貧困、保健衛生、教育などが大きな課題である。同国の60%以上が、1ドル以下での生活を強いられている。また、マラリア汚染地域としてWHOに指定されている。さらに、2003年に行われた野犬の調査では、約2/3が狂犬病に感染し、自然のキツネザル類等にも感染していると考えられている。一方、日本の企業(住友商事)とJBICによって、100億ドルのニッケルの鉱山開発が、現在、最も大きなプロジェクトになっている。

そんな中、大統領が中心となって青少年の教育に熱心に取り組んでいる。その成果の一つが、NGO サクラの若者たちである。現在、9名のメンバーで構成され、商務省や大学などで勤務しながら、民間のため、国のために貢献したいと強く望んでいる。今までアフリカ大陸の貧困や飢餓、独特の精神構造などに対して、無知、無関心であった。しかし、彼らもまた、多くのアフリカ人と同じように、貧困や飢餓、更にはエイズなど人間共通の苦悩があることに気づき始めている。NGO サクラの会長は、自分たちは一体何人だと問い、「自分たちのアイデンティティを求めている」と語った。乳井大使は、「マダガスカルは国民のメンタリティを変える必要がある。そうでないと国としてつぶれる。一つにまとまり、国のために働き、外へも目を向けないと鎖国になる。」と語りかけた。日本人の貧困の認識は「物質的不自由=貧困」と捕らえやすい。貧困はただそれだけではない。精神的な不自由、つまりアイデンティティのなさも「貧困」と言える。

われわれは、彼らの国が「鎖国」とならないように、援助活動と交流することで、アイデンティティを強く意識させ、それを確立することが可能になるのではないかと。国際理解のための特別な装置は必要なく、人間としての基本は同じであることに気づき、理解しあえることが最も大切ではないか。彼らにとって「友だち」がいることは「貧困」ではないといえないか。今後は、NGO サクラの会長から要望を受けたマンゴの栽培方法、漁村の開発に対し徐々に考えていくつもりである。さらに、救急自動車の作動と消火活動等の指導、青年の家への物資支援ならびに青少年との交流を図る事業を検討したいと考えている。

乳井大使が、「アイデンティティを探る若者への支援を」と言われた言葉がとても印象的だった。



マダガスカル共和国ムランガ市の様子

## 「アイユーゴーとの出会い」

アイユーゴー理事 内田 浩幸

アイユーゴーとの出会いと言うよりは、新田代表との出会いになりますが、初めて出会いは1999年の秋になります。当時塚田理事と私は、



(社)日本青年会議所東海地区協議会の東海GTS委員会委員長と総括幹事として2000年4月開催する事業「東海GTS(グローバルトレーニングスクール)2000」を担当しておりました。役員会で当初プランがひっくり返され、「ラオス」にて研修を行うこととなり、悩んでいた時期でした。

ラオスで事業を行うにしても何のツテもありません。情報を集めていると「NICCO」という団体に辿り着きました。連絡をすると、「東京に行った帰りに浜松に寄りますから是非お会いしましょう。」ということでお会いしたのが当時「NICCO」の事務局次長をされていた新田代表でした。



当時の新田さん・内田さんや塚田さんメンバー

私どもの事情を話しラオスにおける事業のコーディネートを可能かの話をしたのですが、交流中心の事業を考えていた私た

ちに、「村人の身の丈にあった」「持続可能な仕組み・技術で」「村人の自立を支援する貢献事業を中心に事業を組み立てたらどうか」と、熱く、熱く語られて目から鱗が落ちる思いでした。そこから事業を組み立てて行き4月には約150名でラオスに行き事業を開催することが出来ました。その体験から新田代表が、「アイユゴー」を設立するとのお話を聞き、そのお手伝いできればとの思いより現在に至ります。

## 「ベトナムを訪問し、感じたこと」

新田 真矢子

最近学んだ語がある。Privilege(特権)。日本で過ごしていると、衣食住に必要最低限以上のもので充ち溢れ、それが当たり前のこととなっている。日本はモノであふれ、人間として大切な、生きる楽しさ、



写真中央 真矢子さん 右側 実加さん

幸せを忘れていたのではないかと。これは、わずかな期間だったが、ベトナムを訪問し、まず改めて感じたことだ。ベトナムの村にいと、同じ人間なのに、Equal なはずなのに、違いが大きすぎ、まるで自分が特別扱いされているかのように感じた。

しかし、ベトナム人にアイユゴーの事業の話を知ったり、ともに食事をしたり、ホームステイをして語り合っ感じたことは、接するほとんどすべてのベトナム人は、わずかに何かが増えるだけで、生きるということに幸せを感じているみたいで、日本人よりはるかに心が動いて豊かではないかと思われ、このことに感動させられた。

特に農業センターを建設し、現地の農民への教育が必要であることがどれだけ大切か、そして、さらに自分たちで生きていく力を養うには子どもたちをしっかりと教育していかなければならず、新しく建てられた小学校が活用できるよう、どのようなサポートをしていくかがこれから大切なことではないかと思った。

もっと自分が与えられたチャンスを大いに利用し、Privilegeの意識をなくし、皆が幸せを感じる場所を作っていくのが自分の役目だと感じた。

## 「ベトナム訪問の感想」

中村 実加

人から聞いただけでベトナムは暑いと決め付けていたが、本当はダラットでは朝晩が寒いぐらい。発展の支援については授業を受けたが、活動の表面的な内容と結果ばかりで物足りない。そんな小さな私の知識をこの旅で大きくすることがで



真矢子さん 実加さん タイ氏 タオさん

きました。ただ援助して自己満足になるのではなく、その発展が持続されるかを初めにしっかり確認する必要があるということが、今回大きく印象に残ったことです。合同セミナーのための打ち合わせや、援助までの下調べ、交渉など、見たいと思っていた場に参加できて幸せでした。街によって想像していたものとは違う風景が広がり、星空も綺麗で食べ物も風味豊かなベトナムにまた行きたいです。

## 「ラオスの人たちから学んだこと」

加藤 三奈

私はこの夏、アイユゴーを通じてラオスに行ってきました。以前からよく父からラオスについて話を聞いていましたが、実際に現地に足を踏み入れる事は初めてだったので、少し戸惑いを感じていましたが、ラオスの人たちと交流していく内に、その戸惑いは徐々に薄れていきました。現地の人たちは皆、本当に心温かい人たちでした。



日本に暮らしていると自分たちがどれだけ恵まれた環境の中でいるのなかなか感じる事ができません。しかし実際に現地で生活してみると、自分たちは本当に恵まれた中にいるのだと気づかされました。しかし反対に、物を大切にする精神、近所の人たちとの深い交流、

時間に追われない生活などと言った現在の日本では薄れていっているものをこの国で見つけることができました。このラオスでの研修?では学ぶべき事が沢山あり、自分を成長させてくれた貴重なものとなりました。



### 【感謝】

アイユゴー通信をご覧いただきまして、誠にありがとうございます。アイユゴーでは「コーヒー基金」を始めました。ミャンマーと国境を接するタイ北部のメーホンソンにて、農業の自立支援事業としてコーヒーの栽培を行っています。メーホンソンの人々は、タイでも最貧困地域に数えられる地域です。是非ともご協力をお願い致します。「コーヒー基金」の詳細内容については、ホームページをご覧ください。

e-mail : [snittaskmj0715@yahoo.co.jp](mailto:snittaskmj0715@yahoo.co.jp)

homepage : <http://aiyugo.fc2web.com>

